

集合住宅内保育施設の園外環境について —子どもの姿と保育環境の関係性の視点から—

市川智之(美作大学)

荻田弘美(美作大学)

1. 背景と目的

保育ニーズの高まりの中、制度面でも立地面でも多様な施設が存在し、園外環境も様々であることが想定される。園外環境について三輪ら(2008)は、施設の認可・認可外を問わず高い頻度で出かける実態を報告している。また松橋ら(2010)は、地域資源の活用について「公園」と「道」が重要な活動拠点かつ地域住民との交流の場になり得る点を示唆している。様々な保育施設が存在する現在、園内環境のみならず園外環境をいかに活用するのかという視点が求められる。

本研究では、都市部(施行時特例市)の集合住宅内に位置する小規模保育事業施設に着目する。先行研究で示された「公園」や「道」にアクセスしやすい環境と想定されるからである。子どもの姿、及びそこに影響する物的環境、人的環境について、その要素=概念を取り出し、各概念間の関係を考察することを試みる。

2. 方法

研究期間: 20XX年10~11月の4日間、各10時~12時の2時間
研究対象: 小規模保育事業のA園、2歳児クラスの園児(6名)及び保育者

観察方法: 主として園外(「公園」「道」での)活動で、参与観察を行い、メモ及びビデオ撮影で記録を行う。

分析方法: エピソード記述法(鯨岡ら, 2007)により、事例を作成する。事例よりM-GTA(木下, 2007)に従い、ワークシートを用いて概念及びカテゴリーを生成し、関係を表すモデルを作成する。

倫理的配慮: 所属大学の研究倫理委員会の承諾を得て実施した。

3. 結果及び考察

計4日間で、全45事例となった(内、施設内事例が8例)。

分析の結果、コアカテゴリーが2個、カテゴリーが6個、概念が23個、という結果になった。各カテゴリーの構成、各カテゴリー・概念間の関係性を示したモデルが図1である。コアカテゴリーを《》、カテゴリーを<>、概念を【】で示している。

モデルは二段構造、上段の《子どもの文脈》を下段の《環境の文脈》が土台となり支えつつ、相互に影響を与え合う構造となる。

《環境の文脈》について、<人的環境>は「集団に関わる保育者の立ち位置」から「個人としての立ち位置」まで働きかけが分類される。子どもが何らかの環境に気づく際には【保育者から気づきを促す】【共感的・応答的な関わり】等が契機となっている場面が多く見られる。つまり<物的環境>や<地域環境>の存在だけでは不十分で、保育者の働きかけ<人的環境>の役割が大きいことが示唆される。また保育者自身の個性が発揮される【子どもとの対等性】【個人としての語り】は、開放感やアクセスのしやすさである【集合住宅固有の環境】【物理的な距離の近さ】、地域住民との【交流など直接的な関わり】【日常的な関わり・見守り】との関連が想定された。<人的環境>である保育者は、子どもの環境への気づきを喚起する上で、意図的に<物的環境><

地域環境>を活用する一方で、保育者自身もまた無意識の内にく物的環境><地域環境>の影響を受けていることが示唆された。

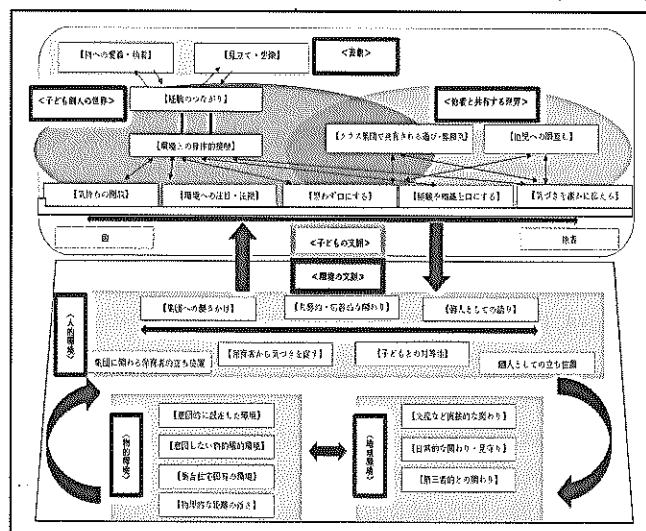


図1 子どもと環境の相互関係モデル

《子どもの文脈》内、子どもが環境に気づく際の、他者の介在性を「個」から「他者」の横軸で表している。一番左端の【気持ちの開放】はそれ自身が環境との接触の姿であり、他の姿における土台になり得ると想定される。個人的に【環境への注目・注視】する姿から、言葉として表出する【思わず口にする】、これまでの体験から【経験や知識を口にする】【気づきを誰かに伝える】と、他者の存在が大きくなっていく。これらの概念は<子ども個人の世界>及び<他者と共有する世界>を構成するが、これらは明確に分けられるものではなく重なり合う。加えて、興味・関心をもった<子ども個人の世界>を深める方向性、一方で発見への共感を含めた<他者と共有する世界>へと進む方向性も示唆された。繰り返して【環境との身体接触】を重ね、【経験のつながり】をもつことが、【物への愛着・執着】【見立て・想像】という<表象>の世界を楽しむ姿につながると想定される。他方、本研究では迫れていないが<他者と共有する世界>の先にも、<表象>に相当する概念が存在することが想定される。

4. まとめと今後の課題

本研究では、当該施設の園外活動で子どもが環境に気づく姿、関係する保育環境を概念として取り出し、各概念間の関係性を考察し、モデルを作成した。また子どもが環境に気づき、継続的に関わる中で<表象>という一定の高まりが想定された。しかし、各概念間の詳細な関係性までは迫れておらず、<表象>に至るプロセス及び、その要因を明らかにできなかった。今後は、各概念間の関係性についてTEM(安田・サトウ, 2012)を用いて分析を行い、<表象>に至るまでのプロセスを明らかにしたいと考える。その上で概念同士の関係性を再検討し、一般化を試みる。